

「ごみ屋敷は罰すればいい」という誤解が広まるのが問題

12月議会に提案される、荒川区良好な生活環境の確保に関する条例案（迷惑えさやり・ごみ屋敷罰則条例案）では、ごみを溜め込んでしまう人に対し、審査した上、罰則を課するという。

ごみ屋敷は、「認知症や統合失調症等が原因」と、介護職の間では常識のように語られている。

何故、人はごみを溜め込むのだろうか。

寂しさ故の異常な行動ともいわれるが、ある精神科医によると、異常収集癖を示す人は脳の一部の活動レベルが低く、事故の後遺症やきわめて軽微な脳梗塞等の可能性もあるという。医学観点、精神的ケアの観点から荒川区が十分検討しようとしないうちは誤りだと思う。

近所と対立しても迷惑なえさやりをする人の場合も、他人とうまくコミュニケーションがとれない発達障がい等の可能性もある。世間とのつきあいを引き受けていた親を失った時、困難事例となりやすいといわれている。家族も地域のつながりも希薄となった現代社会の生み出した不幸なのかもしれない。

異常収集行為と局所脳損傷との関連研究

アイオワ大学の Steven W. Anderson 博士らは、ごみ屋敷の定義は (1) 過度の収集 (2) 無用なものの収集 (3) 通常の活動の妨げになる収集 (4) 脳損傷後の収集開始 (5) 異常な収集行為を改めることへの抵抗であるとしている。そして、他の脳障害と比較して、特定の部位（前頭前皮質）に障害があるとごみ屋敷が出現すると発表（インターネット情報）

ある精神科医は言う。問題解決の鍵は「孤独感の解消」

荒川区は下町人情の豊かな地域である。おせっかいおじさん・おせっかいおばさん運動にも取り組んでいる、この荒川区で、障がいや病気かもしれない人を罰する条例を全国初でつくるなんて、私は情けない。問題行動を起す人の人生背景を知り、共感をもって話を聞けば必ず、問題は解決できる。

迷惑えさやりやごみ屋敷には、区が相談しやすい窓口をつくり、社会福祉協議会や地域のおせっかいさんにも協力を求めて、問題が大きくならないうちに解決する体制をつくる必要があるだろう。

「孤立死」ゼロを目指して

今年3月、厚生労働省老健局計画課認知症・虐待防止対策推進室が高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議報告を公表した。単身高齢者や高齢者のみ世帯が増加している中で、都市部などにおいて、地域から孤立した状態で高齢者が死亡する事例が社会問題となっている。一人暮らしを支える、温かい地域づくりは高齢者虐待の早期発見や認知症高齢者等の支援、災害時における被害拡大の予防、そして、ご近所トラブルにも有効に機能するだろう。「認知症を知るキャンペーン」も、温かい地域づくりに有効と考えて私は区に提案した。ご近所のつながりを大切にしたい地域づくりをめざしたい。

男女平等 日本98位に後退

2007年 128カ国中91位
2006年 115カ国中80位



世界経済フォーラムが世界130カ国を調査、女性国会議員・閣僚の数の少なさや昇進の不平等が顕著である日本はさらに順位を下げた。

持続可能な経済とは？

アメリカ発金融危機の影響ですでに区内の中小零細企業の悲鳴が上がっている。自らの投機経済の行き過ぎ故の恐慌だが、アメリカ国債を支えているのは日本である。日本人の貯蓄が急速に減少している今、借金だらけの国や地方自治体への影響が懸念されている。アメリカ一辺倒の国策を転換し、環境保護を掲げ、地域経済の循環をめざす動きを創り出すことが求められている。